

〈ペンテコステ礼拝説教〉 2013年 5月 19日

ペンテコステ讃美礼拝― 「今日」という日のうちに！

ヘブライ人への手紙 3章 7～15節

武田真治

一、ペンテコステは日曜日

「ペンテコステ」という言葉の意味は、「50日目」という意味です。イエス様が復活された日を1日目と数え始めて、ちょうど50日目がペンテコステです。そして復活された日が日曜日ですから、50日目も実はちょうど日曜日になります。みんなが日曜日に集まって讃美をし、イエス様との晩餐のことを思い出しながら聖餐を行っていた時に聖霊が一人一人に降ったのでした。そしてこの地上に初めての「教会」が誕生したのでした。私たちも讃美と聖餐式をもって、このペンテコステの礼拝を祝い献げることで、更に豊かに聖霊を与えられたいと願っています。

その思いをより表す為に、今日は特に「讃美礼拝」の形式で礼拝を献げたいと思いました。いつもよりたくさんのお讃美歌を歌います。また礼拝説教も、讃美歌作詞者の信仰から学びたいと思いました。

二、讃美歌『よろこびの日』

そこで今日は『さんびか21』の204番（『旧讃美歌』の54番）を取り上げます。この讃美歌は、まさにその題「よろこびの日」に表されていますように、この主の日の礼拝を喜び、お祝いしようという讃美の思いに溢れています。

日本語の歌詞「よろこびの日よ、ひかりの日よ～」では、その溢れる讚美の思
いが良く伝わらないと思いましたので、今回、教会員のある方に特にお願いして
原曲を翻訳して頂きました。原曲は6番まであります。お許しを得て以下に翻訳
を掲載させていただきます。(翻訳のご奉仕に感謝しつつ)

安息と喜びの日よ

c・ワーズワース作詞 (1862)

一、

安息と喜びの日よ 光と歓喜の日よ

心労と悲しみを慰め癒す

いと美しく 光り輝く

主の日には 身分を問わず

老人も若者も声を合わせて

聖なる 聖なる 聖なるかなと

大いなる三位一体の神を歌おう

二、

主の日 天地創造のとき

光が最初に生まれた

主の日 私たちの救いのため

キリストは黄泉から甦られた

主の日 私たちの主は死に打ち勝つ

天より送られた聖霊

こうして主の日に 栄光にあふれて

三つにして一つの光を授けられた

三、

主の日は港 私たちを取り巻き

吹きすさぶ嵐から守る

主の日は庭園 パラダイスの流れで

潤い 分かたれている

主の日は 人生の 乾いた侘びしい

砂地にある私たちを潤す泉

その日 ピスガ山の峰にいるように

私たちは約束の地を望み見る

四、

主の日は聖なる梯子

天使たちが行き交うところ

日曜ごと 喜びは一層高まる 天に

私たちの故郷にさらに近づけば

うまき休息の日 愛の日なれば

この俗世から上なる高いところへと

戻り行く日

五、

今日 疲れている民たちに

天のマナが降りそそぎ

聖なる集会へと銀のトランペットが

皆を呼び集める

そこでは 福音の光が清らかに

まばゆく射して輝いている

そして 命の水が流れている

魂を新たにす流れとなって

六、

私たちのこの主の日に 神の

新しい恵みがつねに増し加わり

私たちは平安に至り

祝福された人々の霊に留まる

聖霊が 父なる神が 子なる神が

賛美されますように

教会は声を高くあげ

神を 三位一体の神を賛美する

この詞は、日曜日を「安息と喜びの主の日（＝イエス様が復活された日）」として、「老人も若者も声を合わせて」讃美を献げる時だとしています。それは何より「三位一体の神」を讃美することが大事だと1番で歌われます。

そして興味深いのは2番です。主の日のことを「天地創造のとき、光が最初に生まれた」としています。これは普通に安息日として天地創造の7日目を考えるのではなく、日曜日は天地創造の第1日目＝光が創造された日としているのです。これはまさに主の日は1週間の始まりの日だという信仰に立って歌われているのです。1週間の始まりの日にこそ神様からの光を与えられる時だと。更に、イエス様が復活された日が日曜日であり、ペンテコステも日曜日であることが示されています。そこには神・子・聖霊の三位一体の神様が描かれており同時に、旧約・イエス様・教会の三位一体もここで語られています。見事な詩作ではないでしょうか。

そして3番では、この地上の歩みに於いてこの礼拝の場所は「港」であり「庭園＝楽園」であり「泉」であると。ここにも三位一体が施されています。そこから4番と5番ではこの地上の礼拝の場所から更に天上の「私たちの（真の）故郷」へと思いを馳せる時でもあることが示されます。今この時に「疲れている民に天

のマナ（＝神様のみ言葉）が降り注ぎ」「魂を新たにする流れと」なると。詩人らしい表現です。

最後の6番では、今この礼拝の時に「私たち」の上にあのペンテコステと同じように「霊」が「留まる」ことによって「教会」となることが高らかに歌われます。だからこそ「教会は声を高くあげ、三位一体の神を讃美する」のだと！

詩人らしい言葉に溢れながらも、教理的な骨格がしっかりとした、この歌を歌う人々を教え導く思いも十分に込められている讃美歌であることが良く分ります。

三、讃美歌作家C、ワーズワース

それもそのはずで、作者であるクリストファー・ワーズワースは、有名なイギリスの詩人ウィリアム・ワーズワースの甥に当たる人物で、小さい頃は2人でよく遊び、共に学んだ仲でした。詩人としての素養はその頃からのものだと言われています。しかし同時に彼は生涯、イギリス国教会の牧師として生きた人物でもあったのでした。

ただ、その牧師としての歩みは決して順風満帆なものではありませんでした。

彼はケンブリッジ大学神学科を優秀な成績で卒業したことにより、そのまま教師として学校に留まります。そして29歳の時、同校のハロー校学長に抜擢され、風紀の改革を任されるのです。しかし余りにも厳しい戒律と訓練を課したため、学生たちの反発を招き、学生数も3分の1にまで減少してしまい、彼は責任を取

って辞任します。そしてイギリスのバークシャー州にある村の小さな教会の牧師として赴任するのです。まさに周りの人からはエリートコースからの挫折と言われたことでしょう。

しかし彼は腐ることなく、その教会に約 20 年間、忠実に仕えます。その教会を愛したことは、この教会の礼拝のために多くの讃美歌を作ったことに表れているのではないのでしょうか。その中の 1 曲がこの讃美歌『よろこびの日』なのです。

四、「今日、神の声を聞くなら」

この讃美歌に溢れている、主の日の礼拝を大切に思う思いは、今日の聖書の箇所である『ヘブライ人への手紙』3 章 7～13 節に見事に言い表されています。

即ち「だから、聖霊がこう言われるとおりに。『今日、あなたたちが神の声を聞くなら、荒れ野で試練を受けたころ、神に反抗したときのように、心をかたくなにすることはならない。』（中略）あなたがたのうちだれ一人、罪に惑わされてかたくなにならないように、『今日』という日のうちに、日々励まし合いなさい。」です。

神の声を聞く「今日」とは、まさにこの「主の日」の礼拝の時のことを指しているのではないのでしょうか。

この時こそ、私たちの心を柔らかかにして、み言葉に聞き従う者となりたいたいものです。何より今日この日に「聖霊の注ぎ」を豊かに受ける者となりたいたいものです。そのことを求める時こそ、今この時ではないのでしょうか？そのことは、イエス様

が「天の父は求める者に聖霊を与えて下さる」（ルカ福音書 11 章 13 節）と約束
して下さっているのですから。 （説教より抜粋）